

下北 現地審査報告書（公開版）

【日程】 2016（平成 28 年） 8 月 9－11 日

【現地審査員】

大野希一（日本ジオパーク委員会）、橋詰 潤（日本ジオパーク委員会）、松原典孝（日本ジオパークネットワーク）

【主な対応者】（職名）

宮下宗一郎（下北ジオパーク構想推進協議会会長・むつ市長）、金澤満春（大間町長）、樋口秀視（佐井村長）、新谷加水（むつ市副市長）、菊池武利（大間副町長）、渡邊修一（会員・JAMSTEC むつ研究所長）、小田桐隆夫（会員・下北物産協会理事）川西伸二（事務局長・むつ市総務政策部長）、角本力（事務局・むつ市総務政策部長）、吉田和久（企画調整課長）、岩佐育夫（事務局・大間町企画経営課長）、菊池敢世（事務局・東通村経営企画課長）、新谷智文（むつ市ジオパーク推進室）、新井田真弓（むつ市ジオパーク推進室）、蛭名貴大（むつ市ジオパーク推進室）、平田和彦（むつ市ジオパーク推進室）、石川智（むつ市ジオパーク推進室）、成田恭平（むつ市ジオパーク推進室）、根本直樹（弘前大学大学院理工学研究科）、植田勇人（新潟大学理学部）、櫻田聖司（東北電力むつ営業所 副所長）、大川敬（東北電力東通原子力発電所 立地地域課長）、小宮山英範（電源開発大間原子力建設所所長代理）、安藤達也（リサイクル燃料貯蔵総務部副部長）、本間將（日鉄鉱業尻屋鉱業所総務課長）、西和幸（日鉄鉱業・尻屋鉱業所総務課総務係長）、小島勝（むつ市政策推進課主事）、氣仙修（東通村ガイド員・東通村観光協会）、小笠原格（東通村ガイド員・東通★東風（やませ）塾、村職員）、成田恭平（東通村ジオパーク推進員・通村経営企画課）、小山卓臣（東通村ジオパーク推進員・東通村教育委員会）、吉田武美（尻屋漁業協同組合参事）、山本義朗（東通村商工会職員）、渡邊代志人（野牛漁業協同組合 参事）、鳥山和之（むつドライブイン）、阿部謙一（田名部中学校校長）、川崎恵美子（田名部中学校教諭）、浜道れもん、古川若葉、田澤蓮天、小笠原蓮、今泉百萌（以上、田名部中学校 2 年）、村口明治（恐山境内ガイド）、澤藤一雄、千賀壽子（以上、下北自然ボランティアガイド）、長岡俊成（大安寺副住職・イカす大畑カダル団団長）、和田榮子（大畑町婦人会会長）、池田和彦、山本俊、光谷拓、新谷久美子（以上、大畑町商工会）、濱田栄子、蛇穴俊榮、佐藤勝秀、佐藤清、坂本誠一、宮崎紅陽、伝法久昭（以上、大畑町観光協会）、一戸正夫（ジオパークガイド員・風間浦村観光協会会員）、古川美香（ジオパークガイド員・古川デザイン室代表）、高橋美保子、浜辺満里、今井千江子、葛西恭子（以上、ジオパークガイド員・風間浦産直友の会）、橋哲彦（下風呂漁業協同組合）、金森一規（ファミリーショップかねもり店主・風間浦村議会議長）、佐賀すみゑ（さが旅館女将・下風呂温泉女将の会）、長谷雅恵（まるほん旅館女将・下風呂温泉女将の会）、木村祐生（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・風間浦村総務課）、祐川俊樹（佐井村教育長）、東出守男（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・佐井村総合戦略課長）、福田純哉（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・佐井村総合戦略課（ジオパーク推進員））、岩佐育夫（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・大間町企画経営課長）、岩瀬望（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・大間町企画経営課）、七島賢人（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・大間町企画経営課）、鈴木夏紀（下北ジオパーク構想推進協議会事務局・大間町企画経営課（ジオパーク推進員））、島野慶司（佐井定期観光ガイド員）、木下貴人（佐井定期観光船長）、鹿嶋年男（佐井村観光協会）、濱石基睦（下北自然ボランティアガイド）、水戸隆爾（野平高原野菜生産組合）、五

十嵐健志（NPO シェルフオレスト館長），田中喜久美（脇野沢ボランティアの会代表），松野祐而（脇野沢ボランティアの会），山崎輝美子（脇野沢婦人会会長），村田鐵雄（水源池公園ボランティアガイド），林順一郎（苫生小学校校長），原穰（苫生小学校教頭），苫生小学校の児童，ほか

<報道関係>

東奥日報むつ支局，朝日新聞社むつ支局，デーリー東北(株)，読売新聞，RAB青森放送，ATV青森テレビ，ABA青森朝日放送，青森朝日放送 営業部，サウンドクリエイト（撮影会社），NHK青森放送局

【見学地点・行程】

- 1 日目：尻労安部洞窟遺跡，むつ来さまい館（審査行程説明ほか）
- 2 日目：尻屋崎ジオサイトー野牛川レストハウスーむつドライブイン（下北グルメジオ定食）ー田名部中学校ー恐山ジオサイトー葉研ジオサイト（地域住民との意見交換）ー活イカ備蓄センター・ホテルニュー下風呂（住民との意見交換）ー下風呂周辺・漁り火ウォーク
- 3 日目：風間浦ジオサイトー大間崎ジオサイトー津軽海峡文化館・アルサスー仏ヶ浦ジオサイトー野平・川内ジオサイトー脇野沢・鯛島ジオサイト（地域住民の活動紹介と意見交換）ー北の防人大湊式番館ー大湊・芦崎ジオサイトー安渡館・交流室（講評・意見交換）

【現地審査のまとめ】

1) 下北ジオパーク構想の概要

下北ジオパーク構想は，むつ市，大間町，東通村，風間浦村，佐井村の5市町村からなる。下北ジオパーク構想は，キャッチコピーとして「海と生きる「まさかり」の大地～本州最北の地に守り継がれる文化と信仰～」を使用している。これは，ジオパークエリアの陸域の形状が「まさかり」に似ていること，海洋に囲まれ海に強く影響され形成した独自の風土があるためである。

エリア内にはジュラ紀付加体から日本海拡大を記録した新第三紀碎屑岩類及び火山碎屑岩類，第四紀火山岩類や堆積岩類が分布し，それらのいくつかは古くから観光地や信仰の地となっている。カルデラ地形や海岸段丘，岩石海岸，砂丘，沈降による平野など地形も多様であり，それぞれの場所でその特徴を生かした生活が営まれている。太平洋と津軽海峡，陸奥湾と3つの海に囲まれる下北では，それぞれの海の特徴を生かした漁業が営まれており，それは大間のマグロや陸奥湾のホタテなど特産品としてのブランドを持つ。本州の最北端であり，最終氷期にも北海道と津軽海峡で隔てられていたため，ニホンザルやツキノワグマなど下北を北限とする動物も多い。また，本州最北の半島端部という閉鎖性の一方，三方を海に囲まれ南北の交流の場でもあるという二面性から，古くから伝わる伝統や信仰に加え，いったん取り入れられた外来の様々な要素は，現代までほぼ形を変えることなく伝承されている。

2) ジオサイトと保全

仏ヶ浦や恐山など，日本でも有数の観光地が重要なジオサイトとなっている。大間崎ジオサイトや尻屋崎ジオサイト，仏ヶ浦ジオサイト，恐山ジオサイトなど，主要なジオサイトの多くは下北半島国定公園に含まれるほか，仏ヶ浦は国指定名勝・天然記念物に指定されている。このほか，下北半島のサルおよびサル生息北限地が国指定天然記念物に指定されており，

貴重な自然資源が保全されている。従来から観光地となっているジオサイトの多くは、歩道や拠点施設等が整備されているほか、遊覧船や観光ガイドが常駐している場所も多い。ジオサイトを有する各地区では、住民自らその価値を学習し、地域づくりやジオツーリズム等に活用しようとするとともに、清掃活動など周辺環境の整備を行っている。今後、各地区での保全活動を統一的に見守り支援できるよう、ジオサイトの定期的なモニタリングや住民からの保全に関するヒアリング等を継続して行う仕組みが必要である。その一方で安部城鉦山跡については、鉦津が周辺環境へ悪影響を与えないよう管理に努めると同時に、ジオサイトとして活用する場合は安全を確保したうえで、鉦山の全容と負の部分を含めた歴史をきちんと伝えるよう整備することが望まれる。また、アイヌ語由来の地名の解説をガイドに取り入れるなど、先住民文化の保全に対する取り組みも一部始まっている。

3) 教育・研究活動

協議会には各市町村の教育委員会が加わり、学校教育におけるジオパーク学習を組織的に支援する体制ができています。その結果、総合的な学習の時間に生徒がジオサイトについて調べたことを絵と文章にまとめた「ジオかるた」の制作や、修学旅行の訪問先で、生徒が自分たちのジオサイトを町ゆく人に紹介する活動が行われている。生徒たちはこれらの学習を通じて、地域の素晴らしさを改めて認識しはじめている。社会教育事業としては、これまで延べ2500名以上の地域住民に対してジオパークに関する各種セミナーや出前講座が行われ、多くの住民やガイドが自主的にジオパークに関する学習を始めたり、他のジオパークに視察に出向くなどの変化が起きている。

弘前大学の根本氏や新潟大学の植田氏、JAMSTEC むつ研究所長の渡邊氏といった研究者が、教育活動や学術情報のチェックやエリア内の研究等に当たっている。下北をフィールドとする生態学や民俗学など研究者の成果の一部も、講演会等を通じて住民に公表されている。「海と森ふれあい体験館」では、海洋学者の館長が地元小学生に貝類の教育とともに研究指導にあたり、その成果を児童が学会で発表している。今後は継続した学校教育、社会教育事業の実施、研究者との連携と支援を行うとともに、最先端の学術情報の共有と住民への普及が重要である。

4) 管理組織、運営体制

平成26年のジオパークネットワーク認定見送り後、構成5市町村をはじめ、国や県の出先機関やエリア内の商工会、観光協会、大学等の研究機関、NPO法人や婦人会などの各種地域団体等が、それぞれの立場で様々な活動を行い、住民の声が表に見える形に改善されている。その結果、ボトムアップ型の推進体制が構築されはじめ、ジオパークに対する地域住民の様々な期待を、2名の専門員を含む事務局スタッフがうまくジオパーク活動に反映させている。人員や予算も確保され、持続可能な運営体制が整いつつある。今後もこの体制を維持し、長期的にジオパーク活動を推進していくことが重要である。

拠点施設については、各地にほぼそれぞれのジオサイトに対応する大小さまざまな施設があり、各サイトの観光や活動の拠点となっている。手作りの展示には工夫がみられるものの、ジオパーク訪問者の入り口となりえる博物館的施設が整備されていないため、住民やガイドの意見を取り入れつつ、現在の展示をよりジオパークに特化した形に改装する必要がある。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

仏ヶ浦や恐山，大間崎や尻屋崎などの観光地では、ツーリズムが古くから存在している。これらの観光サイトには案内看板やガイドが整備され，歩道や展望台，遊覧船等も充実しているが、これら以外の地域でもジオツーリズムの展開が始まっており、ジオツアーも複数回実施されている。飲食店や小売店が考案した「ジオ商品」も複数あり、ジオツーリズムの大きな売りとなっている。現在は既存の観光案内やガイド内容にジオパーク的要素を加えている状況であるが、専門用語の誤用が散見されることから、今後は観光関係者に対する継続した学習機会の提供や、学術的なサポートが求められる。

ガイド養成と認定については、現在中途段階であり，継続した学習の機会の提供と質の向上が求められる。下北エリア内外の大学や研究機関と連携し，地域住民とともに各地域で語るガイド内容のストーリーを練っていくことが大切である。さらに、既存ガイドや新規に養成したガイドが、認定後に活躍する場を創出することも重要である。

6) 国際対応

仏ヶ浦や恐山等一部で外国語対応がされているが，ジオパークの基本看板等は日本語のみである。どの国からの外国人が多く来訪するかを把握しつつ，その地域の言語の解説を盛り込むなどの対応が望ましい。

7) 防災・安全

統一デザインとなっている各地のジオパーク看板には，散策ルート以外は立ち入らないこと，高波や荒天時は見学を中止すること，地震や津波の際は指定の避難ルートに沿って非難することなどが記載されているほか，ガイドなどジオツアー実施者には，荒天時等危険が予測される場合，ツアーは実施しないよう呼び掛けている。防災・安全に関しては今後も研究機関等と連携してエリア内外の自然災害の可能性について把握するように努めるとともに，継続して住民およびガイド向けの自然災害やリスクマネジメント等に関する学習の機会を提供し，防災・安全対策を強化していくことが求められる。